
God Silver Beats!

銀神戦線

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

God Silver Beats!

【Nコード】

N3343N

【作者名】

銀神戦線

【あらすじ】

音無結弦が死後の世界に来る大分前の話。戦線がまだ本格的に活動してなかった時のお話です。この作品は自分、godaccellと銀吟さんとの共同戦線となります。楽しんでいってください

1 - Starting (前書き)

楽しんでいってくださいね

1 - Starting

いつからか私はそこにいた。

そこにいて楽しい学校生活を送っていた。

ただ神様に対する恨み言だけは一回たりとも忘れた事はない。

神様は無慈悲だ。

私があんな子供の時にあんな仕打ちを向けるなんて、だから私は、私の為に、神様に挑戦する事にした。

例えその結末がどうなるかと、私が後悔する事は絶対はないと信じて。

私、仲村ゆりはそう固く誓った。

*

屋上で私は気の合う仲間、日向秀樹と会話していた。会話の内容はどうしたら神を殺せるかと言う事。その答えを簡単に提示してきたのは日向の方だった。

「知ってそんな奴に聞けばいいんだよ、一人居るだろ、知ってそうなやつ」

「そうね……例の天使の事かしら？ 本気で言ってるのならここから蹴り落としてあげたいくらいだけど」

「本気だ」

学校に絶叫が響き渡った。

しばらくしてさっき学校の屋上から落とされた日向が屋上に入る

ドアから入ってきた。

「あら？ 早かったわね」

「っ まあいい、ゆりっぺは何か策があるのか？」

「無いわよ、だからこうして考えてるんじゃない」

ゆりはぶっきらぼうにそう言うと、ムスツとした顔を日向に向ける。

日向はその姿に一瞬ドキツとしながらも、それを隠すように溜息をつく。

「まず俺達と同じやつらをもっと集めようぜ、流石に今の人数じゃあ心許ないだろ？」

「……そうね、まずはそこからね」

ゆりは気を取り直して一伸び。

それからどうどうと胸を張るようにしながら歩く。

日向はその後ろを付いていく。

二人がまず見つけたのは校庭の端、飼育小屋の前でうずくまっている女生徒だった。

何をしているのかと観察している二人にも気付かずにただひたすらに、飼育小屋の中にいるうさぎをなで回していた。

十秒、一分、一分半、二分、三分、五分、十分……。

流石に待つ事にも退屈してきたゆり達はその女生徒に話しかける。

「こんなところで何をしているのかしら？」

「っ！ 何者だ！」

女生徒はいきなり声を掛けられて驚いたのか、手元に置いてある

刀を抜いてゆりに突きつける！

日向が割り込もうとするのをゆりは手で制して、堂々とその女生徒を見る。

指定の制服は仕方ないとして、首に巻いているマフラーはとても暑そうだ。

「あなたいい腕ね？　どうかしら、入隊してくれない？」

「何にだ？」

「死んだ世界戦線、今は人数が集まってないから、まだ活動はあんまりしてないけど、あなたの強さはいつか必要になると思うの」

ゆりが手を差し出す。

女生徒はしばしその手を眺めていた。

が、それほど時間がかかる前にその手を握りしめた。

「いいだろう」

「きつと使い切ってみせるわ、あなたの力」

「そういえば、本拠地作ってないな……ゆりっぺ何か良い所知らないか？」

そうね、とゆりが何かを考えるようにする。

そしてニヤツと悪戯を思いついたような顔を見ると、日向にこそそつと耳打ち。

それに対して呆れたように苦笑する日向は用事があると言ってどこかに行ってしまった。

ゆりはそれを見送ってから、椎名の方に向く。

「これから実力見せて貰うわ」

「？　何か知らんが任せろ」

椎名の協力を得られた所で、ゆりは作戦の内容を椎名に話す。
それを聞いた椎名は驚きを顔全体で表した後、ニヤツと好戦的な
笑みを浮かべる。

「そんな事をしてもいいのか？」

「そんな事言う割には顔が笑ってるわよ？」

二人して笑う。

そして互いに拳をぶつけて、走り出す。

『オペレーション・アワホーム』開始だ。

*

ということでゆりが本拠地として選んだのは、教員棟最上階にあ
る校長室だ。

前々からここを見張っていて、校長室が使われていない事を知っ
ていたので、ここにしたらゆりは言うが、メンバー全員の気持ちと
しては、ここが一番高い位置に立てるからだろうという予測が立
られている。

集まっているメンバーはそれぞれ戦う為に必要な物……ではなく、
個人として楽しめる物を多く持ってきているのが分かる。

それをみたゆりはちよつと怒った様に言う。

「ちよつと！ 遊ぶ為の場所じゃないのよ！」

「違うのか？ 日向がそう言ってたんだが……」

「ひくなくた〜く〜ん〜？」

顔中で怒っている事を示したゆり。

その横で可愛いおもちゃの犬を抱えながら固まっている椎名を、

ひなたは無視する。

「そ、そうだゆりっぺ！ 仲間に来たそうな奴らがいるんだ！ そいつらのところに行こうぜ！ な！？」

「……ふくん、いいわよ。だけでもし頼りなさそうなやつなら……」

ゆりが持つている銃に弾を装填する。

そしてそれを日向の額に突きつけながら、

「どうなるか分かってるわよね？」

「は、はい、もちろんです……」

「よろしい じゃ、私と日向君は少しでるから、その間に片付けておいて。無駄な物を見つけ次第没収だからね？」

ゆりと日向が出ていった後、後ろでがたがたと騒がしく音が鳴り始めたのを聞いて、不安を隠せなくなる日向だった。

7

ちなみに、こんな事になったのは、実は日向が言っても誰も来なかったので、「遊び場が出来たぜ！」と公言したからなのは、まだゆりは知らない。

*

ゆりと日向はしばらく歩いて居ると、どこからかギターの引く音が聞こえてくる。

どこか落ち着いた、それでいて心に響くようなギターの音色だ。

「この音は何かしら？」

「あいつのギターだ。心に響くだろ？ これを使えば囦とかにはなるんじゃないか？」

「ふ〜ん……そうね、それでいきましょう」

音が響いているのは誰も使っていない空き教室の一室。

そこだけがこの死後の世界で唯一スポットライトが当たっているような感覚がある。

その音が止み、しばしの静寂が余韻と共に流れる。

二人はそれをすっかり堪能した後、ゆっくりとその教室の扉を開けた。

そこに居たのは一人の女子生徒、使い古されたようなギターを持って机に座っていた。

そしてまるで近くで聞いている人に聞かせているような感じだ。

その女子生徒がフツと気が付いたように教室のドアを開けたところに立つ二人の方に目を向ける。

敵視はしていないが、視線だけで「誰だ」と問われている様な感覚がする。

「突然で悪いけど、戦線に入らないかしら？」

ゆりはあえて自己紹介はせずに、単刀直入、正々堂々とそう言うてのけた。

1 - Starting (後書き)

一話目なので短めです。

次からは長くなるかもですよー

それでは、銀吟さん、お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3343n/>

God Silver Beats!

2010年10月9日12時34分発行